

# III. 身分と道德、近世社会とは何か

## III-1 序論 死と国家

国家権力はけっして生者の世界にだけ広がっているわけではない。《死》という虚構の世界にもその足場をもたねばならず、また死者の世界に端を発してこそ、国家である。(死はつねに他人のもの)

- 祖先崇拜・極楽往生・慰霊・供養・戦争・\_\_\_\_\_
- 国家の正統性(レジティマシー/オーソドキシ) なぜ天皇か? —国生み神話

## III-2 豊臣政権の意味——国家祭祀復興、死者の世界の再統治——

応仁の乱は、たんなる幕府(武家)秩序の壊滅ではないし、武家政権内部の権力争いでもない。古代以来受け継がれてきた祭祀廃絶、国家規模での統治の正統性の崩壊現象。

かならずしもそれ(統治の正統性破壊)を目的としていなかった内乱のさなか、内裏に燃え移った火が、結果的に将軍はおろか各地の守護にまでおよび、実力で地域を支配する群雄割拠の時代となった。

### ★ 死についての二つのイデオロギー

- ① 一向宗「進者往生極楽、退者無間地獄」 / ② 織田信長「天下布武」

- 150年にわたる戦乱は大量の流民を生み出す。足軽か、一向門徒か?
- 一向門徒に対しては殲滅戦を断行、「魔王」(『日本耶穌会年報』)を名乗る以外なかった。

### ★ 「神国思想」——束の間の光芒——

「日本ハ神国」(天正15年6月19日付豊臣秀吉定書、いわゆる伴天連追放令第一条)。

- 秀吉は小牧長久手開戦(天正12年3月8日)後も雑賀一揆鎮圧のため大坂に在城。その直後の17日、「すなはちおもひたち」(『豊臣秀吉文書』973号)、伊勢の遷宮復活。合戦中5月1日延暦寺根本中堂再興・9月3日長谷寺観音堂造営など、旧儀復興・獵官活動。天正13年7月11日関白就任、翌日安土証文の返還。天正14年4月1日大仏再建候補地選定。(Cf. 庄 佩珍「神国思想に関する研究—豊臣政権期まで—」、清水有子「豊臣秀吉の神国宣言」)
- 古来天皇家の祭祀を補弼してきた藤原氏を名乗り、藤氏長者に。王政復古へ。
- 秀吉の跡を襲った秀頼とその母淀君とがおびたしい数の寺社仏閣を再興したことは、将軍家とは異なるこの政権の性格をよく示している。

## III-3 ふたたびの夜——近世社会、死の抑圧——

### ★ 朱子学、新しい国家の正統性

『資治通鑑綱目凡例』によれば、一度でも帝位の継承がおこなわれれば正統とみなす。

- 祭祀の質や実践性ではなく、血の継承回数を重視。
- この正統論では、皇統一系を誇示する日本の皇室は傑出した存在。北畠親房『神皇正統記』
- ただし、『神皇正統記』はけっして血統を受け継ぎさえすれば(「継体」)正統としているのではない。南北朝期までは依然、身体性と精神性の両者は一体。『正統記』の表現でいえば、「神代より継体正統のたが(違)はせ給はぬ一はし」(光孝天皇条)。

## ★ 林羅山の神儒合一論、秀吉の「神国思想」の乗り越え

天照大御神を「天照大神」とし、日本における堯舜（聖人）に比定。

- アマテラスは人間であり、道徳的存在として、神道を儒学化。  
（国際的な儒学の理念では、日本の国生み神話は通用しない。）  
Cf. 林羅山『豊臣秀吉譜』……秀吉は本当は將軍になりたかった説の出所。

## ★ 死への配慮

死と国家（前近代…… \_\_\_\_\_ ・ 戦争 / 近代…… \_\_\_\_\_ ・ 戦争 \_\_\_\_\_）  
死を恐れぬ者と恐れる者、死の訓練（武士の場合…… \_\_\_\_\_ / 一向門徒の場合…… \_\_\_\_\_）

- 前近代のひとびとの死への配慮を忘れないようにしよう。
- 国家はけっして俗世だけがその場所ではない。
- ・ 豊臣政権……神国思想。おびたしい数の寺社仏閣の復興。方広寺大仏殿はその仕上げ。
- ・ 徳川政権……正統性を合理的な儒学に依拠。宗教的要素を排し、家＝血＝身体の継続に焦点。  
血の継続性は同時に有徳を意味する。国家祭祀に無関心!

智仁勇の志ありとて、その身病身にては、其志もとげがたかるべし、人は先すこやかに、無病ならねば、その志もとげがたき所を心得て、常に我身の生れ付きたる所に不足なる所を、医師にも問ひ、其身も篤と考へて、昼夜に保養あるべきこと也

ぶしとしては  
妬山堂盛正『武士止之帝八』（1853年）

- 健康第一主義（柴田純『江戸武士の日常生活』講談社）。
- 宋学（朱子学）にもとづく漢方の発達。理気二元論といわれる独自の身体論。  
← 古方派（後藤良山、香川修庵、松原一閑齋、山脇東洋、ら）の批判。  
「孔子の聖道と医術の本は一つ」。  
← 蘭学（渡辺崋山、高野長英、前野良沢、杉田玄白ら）。理気二元論とは異なる身体論。
- 鬼神の否定。神＝人間。新井白石『鬼神論』（Cf. 菅野覚明『『鬼神論』の前提』『倫理学紀要』12、吉田真樹『平田篤胤』）  
← 仏教による地獄（六道）イメージの形成。恵心僧都源信『往生要集』（985）の民間流布。  
← 鈴木正三『因果物語』、『死霊解脱物語聞書』の流行。

## III-4 夜の爛熟——恋の抑圧——

## ★ 《家》の継承

前近代の《家》は、円滑な分業体制（身分秩序）を維持するための重要な拠点。生殖にもとづく職人の再生産機構であり、同時に職人を育成する学校としても機能。（後者を重視するなら養子容認、さらには絶家再興。）

- 家康の血＝徳の継承のため、おびたしい数の分家（御三家や御三卿など）および三千人を超える「大興」システムを構築。反対に血の継承に失敗した大名家は徳も断絶。ゆえに取り潰し。  
「私ニ婚姻ヲ締ブ可カラザルノ事」（『武家諸法度』）
- こうした静的な昼の秩序を動的に補完したのが次男以下の男子（Cf. 水本邦彦の諸研究）。近代風にいえば、自由な（ただし夜の、というのは蔑視を受けるから）労働者として、さまざまな不測の需要に対応。畿内の世俗権力不在が一種のアナーキー状態を生み、それを後押し。

## ★ 国家祭祀の不在

近世において、徳川権力が期待した医療は死の世界をわずかに覆い隠すにすぎなかった。現世的な血によってのみ権力の正統性を担保することは困難。国家権力による死の世界＝虚構の世界の黙殺と死から生へ、生から死へ、といった生成変化の抑圧は、かえって夜の世界の充溢、鎮まらぬ魂＝幽霊の跋扈を許した（Ex. 「怪談」の流行、家ごとの墓参。近世寺院は大量死に対

応できない)。

### III-4 光明——井原西鶴——

#### ★ 西鶴はいかに読まれたか？ 天才西鶴。

- ┌ 封建社会の反逆児？（1980年代まで）
- └ 自由な近世社会の象徴？（1980年代以降）

こころと恋に責められ、五十四歳までたはぶれし女、三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人、手日記にする。「井筒によりてうなるこ」より已来、腎水をかへもして、「さても命はある物か」。

「これぞ二度都へ帰るべくもしがたし。いざ途首の酒よ」と申せば、六人の者おどろき、「ここへもどらぬとは何国へ御供申し上ぐる事ぞ」といふ。「されば、浮世の遊君・白拍子・戯女見のこせし事もなし。我をはじめてこの男ども、こころに懸る山もなければ、これより女護の嶋にわたりて、抓みどりの女を見せん」といへば、いづれも歡び、「譬へば腎虚してそこの土となるべき事、たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と、恋風にまかせ、伊豆の国より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずになりけり。

井原西鶴『好色一代男』1682年

- 《恋愛》が抑圧（許されているのは家系持続か純粋な性欲の発露のみ）されるなか、商人を父に、身受けした娼婦を母にもつ世之介が3000人の女と関係して子をなさず（＝一代男）、根なしの浮き草として海に消える、ユーモアに満ちた、しかし狂った悲劇。
- 長男は家に束縛され、次男以下は子をなさずに死ぬことが要請される社会（恋愛にいたらぬぎりぎりのところにとどまる「粹」を求める「好色」は、江戸期にはひとつの道徳でさえある）。女の抑圧はいわずもがな（「喰はで死する悲しさよりはと、それに身をなす」『好色一代女』）。遊郭・蓄娼・春画の隆盛。性病の蔓延。死生をめぐる近世社会の狂気。